

「聖霊降臨の祈り」

2026.9.2
使徒の働き 1:8、13～14
2:1～4

この前、香登修養会がありました。心の渇きをもって、多くの方々が集っておられました。私たちにも心の渇きがあますか。それを満たしてくださるのは**主**です。

主に願い求め祈り、神様は必ず私たちの求めに応え与えてくださいます。

使徒の働き 1 章 2 章を開いていただきましたが、有名な箇所です。

聖霊降臨、**主**の約束、弟子たちの祈りが記されています。祈ることにおいては 13～14 節のことが非常に重要であると思います。しかし、その前に**主**は弟子たちに、そして今の私たちにも、約束を与えてくださっておられます。

1, 主の証人となる

昔、青木澄十郎と言う旧約をよく研究され詩篇の研究という本も出版された先生がおられました。ある日ウイルクス先生に面談し、きよめの恵みが欲しいと行ってこられたそうです。

英語で、I want Power. (力が欲しい) すると、ウイルクス先生はクルッと背を向けられ、吐き捨てるようにパワーは危険だと言われたそうです。

その後、青木先生は、畑の中を散歩し祈っている中に、砕かれ、きよめられる経験をされ、大いに用いられたと伺いました。

「聖霊があなた方に降るとき力を受け」とありますが、きよめられていないのに力だけ与えられるのは危険であり、無謀です。神様はそのようなことはなさいません。

必ずきよめられてから、力を与えてくださいます。

イエス様は前もって弟子たちに約束されました。「父が約束されたもの、すなわち聖霊を送る。いと高き所から力を着せられるまでは、都にとどまれ」

その目的は「**罪の赦しを得させる悔い改めがエルサレムから始まり、あなたがたは証人となる**」(ルカ 24:47～49)と言われたのです。

それで彼らは、多の地方に逃れないで、非常に危険なエルサレムにとどまったのです。

彼らは**イエス様の命令に従いました**。

2, 心を一つにして祈る

弟子たちは、エルサレムにとどまりかつて**最後の晚餐を主とともにした二階座敷に集まり**、祈りました。最後の晚餐では、**誰が一番偉いか**と議論していました。

ペテロは「たとえ死ななければならないとしても、**知らないとは決して申しません**」(マルコ 14:31)と言ったのです。しかし彼らはイエス様が捕らえられたとき**逃げてしまった**のです。それが弟子たちの実際の姿でした。しかし**主は**、十字架に架けられた後**よみがえられ**、ガリラヤで弟子たちと合い、**彼らを励まされました**。そして「**エルサレムを離れないで、父の約束を待ちなさい**」と言われたのです。

使徒たちは2階座敷で、イエスの兄姉や母マリア等の女性たちといつも心を一つにして祈っていたのです。ここが大切なポイントであると思います。

他の訳では、**絶え間なく、熱心に**、そして**心を合わせて**と訳されています。祈りは、得るまで、受るまで求め続けていく必要があります。諦めないことが肝心です。

そして**心を一つにして、心を合わせて**祈る、祈る心が一つになっていく。
かつては彼らは心を合わすことができませんでした。**自分が偉い、他より優れている。高慢な心**があったのです。

イエス様は、「仕えられるものではなく仕える者になりなさい。」と彼らをたしなめられました。それは、最後の晩餐まで続いたのです。

彼らに**必要なことは、心が一つになる**ことでした。そのために必要なのは、**謙遜になることへりくだること**です。でも、兄弟の間では難しいと思います。

私も経験がありますが、神学校で作業等をするときに意見が異なる、**自分が正しい**お互いに主張し譲り合えない。ぶつかってしまう。関係がギクシャクする。すっきりしない。しかし、火曜日の定例祈禱会、最後は自由祈禱になります。あるとき意見の合わない人が隣におり、黒板に記された祈禱課題を祈って行くのですが、最後に、作業がはかどらない問題が解決できますようにと祈り、なぜか解らないですけども声が重なり一緒に祈る。すると心が碎かれ、十字架の愛によって心とかされ、ついには祈る心が同じになり、和解する。問題が解決することができた、ということがありました。

おそらく弟子たちも、祈る中に碎かれ、溶かされ、一つになったのではないのでしょうか。祈りの中に御霊は働かれるのです。

3, 聖霊に満たされる

ペンテコステ五旬節は収穫感謝祭のときです。元々は大麦がとれ、収穫を共に喜び祝う日です。その日に、聖霊は臨まれ、皆が聖霊に満たされたのです。

激しい風とありますが、**風は息**とも訳される言葉で、彼らにいのちの息が、聖霊の息が吹き込まれたのです。

そして、**火は神の臨在**を象徴するものであり、焼き尽くす火、彼らの心を火で焼ききよめ、彼らの心は燃やされたことでしょう。

今も聖霊が臨まれるとき、私たちにいのちの息を吹き込まれ、燃える心が与えられます。

先月私は京都北部の福知山に行きました。

教会員の家族の記念会に招かれ行ったのです。そのついでに峰山教会に行きました。

それは長年牧会されていた並河先生が「この講壇だけは、会堂を新築しても残して欲しい」と言われたものがあったからです。写真は見たことがあるのですが、なぜか実際に見てみたいと思い、記念会の後に、峰山教会にお伺いしました。それは、礼拝堂にありました。

1926 年 11 月に峰山教会の初代牧師として富田^{しずお}鎮男先生が遣わされ、今年でちょうど 100 年です。

1927 年 3 月 7 日夕刻、北丹後大地震が起き、町全体の 97%が全壊全焼する、町民の約 24%、1,103 名が死亡する大惨事でした。

富田鎮男先生ご一家も被災され、奥さんとお子さんはかろうじて助かったものの、鎮男先生は家に閉じ込められ、隣家の延焼にあい「神よ、町の人々を救ってください」と祈りの声を残し召されたのです。

翌朝、信徒の人たちが瓦礫を掘り起こす中、鎮男先生の亡骸が発見されました。手を組んだ祈りの姿のままであったのです。

翌年、峰山教会は簡単な平屋を建て、再開しました。その折、先生の父、富田四惣治兄は香登から「神は愛なり」と刻まれた講壇を献納されたのです。

その時、列席の皆さんに「息子を褒めてやってください」と深々と頭を下げられたそうです。それを聞いた人たちは心励まされ、一層奮起して伝道に励まれたとお伺いしました。私はその講壇を実際に触り、見る事ができたのです。私も心燃やされる思いでした。

伝道は、人間の一時の思いや感情力ではできません。しかし聖霊が臨まれるとき私たちは力を受けます。そして地の果てまでキリストの証人となれます。

- ① 私たち必要なのは聖霊の満たしです。まず私たちは自分の無力さを認め、自己中心を悔い改め、明け渡し、御聖霊に主導権を委ねましょう。主に従うものとなりましょう。
- ② 教会があのだう座敷屋上の間のように、祈りの場所となつて、心砕かれ溶かされ、一つとなつて主の約束を信じ待ち望み、祈る共同体となりますように。
- ③ 一人ひとりが家庭や職場日常生活の中で、主の愛と聖霊の助けによつて福音が伝えられるように祈りましょう。